

そんなわけで始まった『折原臨也が期間限定の恋人』という日々は存外、楽しかった。

何しろ臨也は話題が豊富で帝人を飽きさせない。普段は縁のない高級レストランにも連れて行ってくれるし、そうかと思うと帝人の手料理を強請ったりする。

おそらく多少の嘘を織り交ぜているのだろうが、語られた仕事の話などは気がつけば夢中で耳を傾けていた。

(ただ、ちよつと問題もあるけど)

どうやら臨也は帝人が思っていた以上に金銭に余裕があるらしく、やたらと物を買ってくれようとする。気前が良い、と喜んで買ってもらえばいいのかもしれないが、本気で援助交際のように気が進まない。けれど、断つても断つても臨也は買ってくれてようとするのだ。そして今がまさにそうだった。

「あ、これ安いな。帝人君の部屋、置く場所あるよね？」

「場所がありますけど、いらないですよ」

臨也の目線の先にあるのはコーヒーマーカーだ。話の流れで鍋をしよう、という話になり、じゃあ、とばかりに帝人の部屋に置くことが前提でカセットコンロや土鍋を買われることになってしまった。つまりはそれで鍋を作れ、という指令でもあるわけだが、喧々囂々とやりあい、そして帝人が負けた。

(別に、鍋を作るのが嫌な訳じゃないけど)

料理は特別うまくないが、鍋は基本簡単だ。今は鍋の元となるスープも多種売っている。……ただし、臨也はこの手のお手軽料理を嫌う傾向にあるので多少帝人はがんばらねばならないらしいが、まあそれはこの際、良い。けれどカセットコンロも土鍋も、帝人の感覚ではすごく安い、というわけでもないのにぼんぼんと買ってくれてしまう感覚が、すごく困る。

「えー、いるって。インスタントより美味いしさ」

「臨也さん、そんなにコーヒー好きでしたっけ？」

「結構飲むし、好きな方じゃないかな」

そうなのか、と思う。確かに、食後も紅茶ではなくコーヒーばかりだった。けれどそこで好きだよ、ではなく、好きな方じゃないかな、という言い方になるあたり、あまりこだわりのないようにも聞こえる。

「帝人君もコーヒー嫌いじゃないよね？」

「まあ、好きな方ですけど」

それこそインスタントとはいえ常備する程度には、好きだ。

「じゃ、やつぱり買おう。恋人の家で鍋して、食後にはゆつくりコーヒーいれてまつたりするって、なんかちよつと良いよね」

うん、と頷き、帝人の意見をそれ以上聞くこともなく、臨也は店員を呼んでしまう。確かにコーヒーマーカーを置く場所くらいは一応、あるのだが、決して帝人の住む部屋は広くないというのに。